

青岐新報

10月25日(金)
発行所 青岐新報社
〒811-5131 長門県青岐市
基ノ浦町赤田崎91-3

野良猫の繁殖にストップを

どうぶつ基金がTNR活動を実施

野良猫や多頭飼育崩壊の飼い猫の繁殖を防ぐ不妊・去勢手術が先月26、27日、青岐市のしんぎょれん跡地で行われた。市が兵庫県を拠点に全国で活動するどうぶつ基金(佐上邦久理事長)に依頼し実施したもので、移動手術車スベイカー1台と獣医師が熊本市から来場し、約100匹の手術を実施した。佐上代表は同日夕方、長門県一市市長を表敬訪問し、本市の野良猫対策について意見を交わした。

1988年に設立された民間・非営利動物愛護団体。民間からの寄付を元に、全国的に活動している野良猫や野良犬の殺処分をゼロにするため多頭飼育の解消、避妊・TNR活動「さくらねこ無料不妊手術事業」などを取り組む。田舎体と猫の飼育も全国で1000を数える。



さくらねこポーズをとる佐上理事と市長ら

建設外には熊本市の猫不妊去勢手術専門機関に「じのはしスベイクリニック熊本分院」のスタッフと獣医師が、29日の夕方、院長の長井和樹さん(48)が、オスなら一回3、5分、メスなら15分ほどで手術した。長井さんは獣医師になって17年、どうぶつ基金の佐上理事長お

設立された動物保護団体「志岐島わんちゃんお守り隊」の29日(ニクキユウ)の研修活動により、野良猫対策への意識が高まっている。市でもどうぶつ基金が自治体向けに発行する無料不妊手術チケットを利用し、過去50頭ほどの不妊手術を行った。今回は、増加する野良猫や多頭飼育崩壊で苦しむ飼い猫を対象に、一日30匹前後を目標に実施された。多頭飼いで世話が難しくなっている家庭を市役所の職員が訪問し、不妊去勢手術の必要性を説明。同意が得られたところは猫を捕獲し、白いシーツに捕獲器ごと包んで会場に持ち込んだ。29日のスタッフと市の職員は、数多く集まった猫を一匹一匹確認し、麻酔から覚めた猫を飼い主に見せ渡した。

長夫妻と29日の松崎純子代表が市長を訪問。猫が1回の出産で5匹生み、1年に3回出産すると3年で2千匹になる。飼い猫も含めてすべての猫に不妊手術をしなければ、結局は元に戻ってしまう解決には至らない。解決には市民全体の協力が不可欠であり、繁殖させる場合は届け出制にするなどのフォローも含頭に置きながら、今後市と市民が一体となり継続してほしいと訴えた。第一歩として、29匹を目標とする11月15日〜17日、5か月あれば達成できると具体的な法算も示した。

期間中には、佐上理事が長夫妻と29日の松崎純子代表が市長を訪問。猫が1回の出産で5匹生み、1年に3回出産すると3年で2千匹になる。飼い猫も含めてすべての猫に不妊手術をしなければ、結局は元に戻ってしまう解決には至らない。解決には市民全体の協力が不可欠であり、繁殖させる場合は届け出制にするなどのフォローも含頭に置きながら、今後市と市民が一体となり継続してほしいと訴えた。第一歩として、29匹を目標とする11月15日〜17日、5か月あれば達成できると具体的な法算も示した。

佐上理事長は今回の活動を支援した本市役所職員への感謝を述べ、「猫も人も優しい島といふモデルを築けたならば、世界に通用する事例となる。観光にもプラスとなるはず。島の人の熱意はすばらしいので、ぜひやり進めた」と述べた。

市長は「一度解決しないといつまでも続く。本市が目指すSDGsにもつながる。全国に向け解決のモデルとなるよう集中して取り組みたい」と前向きな意欲を示した。

本市では新たに野良猫の数すら把握できていない。生まれれた子猫を海へ投げるなど、身勝手な遺棄する例も多数ある。また、手術が問題解決のゴールではない。さくらねこになった後、寿命が尽きるまで地域や家庭で世話をやる必要がある。本市の地域猫活動は現在まだ2件のみだ。課題はまだまた山積みだが、手術して性格が穏やかになった猫は町の癒し役となり、観光の相乗効果となるケースもあるという。

青岐は日本で最古のイエネコの骨が発見された

地でもある。其の歴史は長い。現代に合った方法でつなぐことは不可能ではないはずだ。



「さくらねこ」が手術を受ける様子